

マックスプランク研究所留学報告サマリー

名古屋大学医学部附属病院 循環器内科

川瀬 治哉

私は 2018 年 4 月から 2025 年 3 月までの 7 年間、博士研究員としてドイツの Max-Planck-Institute for Heart and Lung Research（マックスプランク心臓肺研究所）の薬理部門に研究留学をしました。渡航に際し様々な不安があった中、臨床薬理研究振興財団から温かいご支援をいただいたことは大変心強く、おかげさまでとても充実した留学生活となりました。ここに厚く御礼を申し上げるとともに、留学報告をさせていただきます。

マックスプランク心臓肺研究所は、ドイツを代表する研究団体であるマックスプランク協会（MPS）によって運営される研究所の一つです。MPS は公的資金のもと国内外で 80 以上の研究機関を運営しており、それぞれが扱う分野は医学・生物学から化学・物理学、人文学までと多岐に及びます。MPS からは、アインシュタイン博士などを含めこれまで実に 30 人以上ものノーベル賞受賞者が輩出されています。当研究所は心臓・肺に特化した研究機関であり、フランクフルトから 40km ほど北に位置する Bad Nauheim という自然豊かで小綺麗な市にあります。

薬理部門のディレクターである Offermanns 教授は、医師であり、薬剤標的として非常に重要な G タンパク共役結合受容体（GPCR）の専門家です。Offermanns 教授のもと、私は主に虚血性心疾患の新たな治療標的となりうる膜タンパク質の解析を、動物モデルを用いて行いました。様々なバックグラウンドを持つ同僚たちと日々切磋琢磨し、研究の技術や知識を深め、そして成果を Science 誌などの一流誌に発表できたことは、非常に有意義でした。名古屋大学に帰任後は、この経験を活かして自身の研究を発展させるとともに、後進の育成にも励みたいと思っております。

本帰国した今振り返ると、これまでと全く異なる環境で新しいことに真剣に挑戦する過程で得られるものは、同時に払っている犠牲に比べ計り知れないほどに大きく豊かで、見える世界は格段に広がったと実感します。様々な国の人たちとの交流を通して、客観的でグローバルな視点から物事を考えるようになり、自分の中にこれまではなかった新しい物差しが増えたような気がしています。私だけでなく家族にとっても大変貴重な経験となりました。最後になりましたが、留学にあたり多大なるご支援を賜りました臨床薬理研究振興財団の関係者の皆様方には、改めて心より御礼申し上げます。



ラボの記念写真（前列左から 2 番目が筆者、後列右端が Offermanns 教授）